

6. オスマン帝国の重層性

鈴木 董*

キーワード: オスマン帝国、イスラーム、多文化社会、統合、共存

Key Words: the Ottoman Empire, Islam, multicultural society, integration, co-existence

- | | |
|--------------------|----------------|
| 1. はじめに | 4. 「文化世界」と地域 |
| 2. オスマン帝国の性格 | 5. 概念と対象の重層性 |
| 3. 「文化世界」と人間集団の重層性 | [付録: 質疑応答のまとめ] |

1. はじめに

私はオスマン朝のとりわけ前近代史を専門とする。今回のシンポジウムのテーマは重層性ということであるが、オスマン帝国を対象としてどう重層性を捉えるかについては、いろいろな議論があり得る。オスマン帝国は、文化的に非常に異なった位相が折り重なり、互いにあるところでは融合し、あるところでははじき合いながら、共時的な構造をなして存在しているという点において重層性の一つの見本のようなところがある。さらに、これをどういう視角から捉えるかという点において、今度は捉える視角のほうも、かなり重層的な形で捉え得るという面もあるかと思う。その意味で、シンポジウムのテーマである重層性という問題にひきつけて論ずることとしたい。

2. オスマン帝国の性格

まず、オスマン国家の性格というところを糸口としよう。オスマン帝国というのは、もちろん近代の呼び名で、トルコ語でもオスマンル・インパラトルルウ Osmanlı İmparatorluğu という言葉は19世紀になってからやっと用いられるようになる言葉で、近代西欧の政治体を分析するときの概念として採り入れて用いた言葉であって、それ自体も本人たちの言葉ではない。しかし、非常に多様な要素を含んだ多元的な国家であり、非常に大きな広がりをもつ、同時に普遍的な価値体系を背景にする存在だと自他ともに認めていたという点で、分析概念としての「帝国」という概念に含まれ得る

* 東京大学東洋文化研究所

のではないかと考えるので、「帝国」と呼ぶことにする。

オスマン帝国、ないしオスマン国家というものは、トルコ、トルコ帝国、オスマン・トルコ等とも呼ばれる。しかし、これはあくまで西欧出自の呼称である。我々も西欧出自の呼称を西欧経由で受け入れて以来、トルコ、トルコ帝国、オスマン・トルコなどと呼んでいる。しかし、前近代のオスマン朝、とりわけ支配層の人々がみずからの国家のことをトルコないしはトルコ帝国と呼んだケースは見うけられない。

では、前近代のオスマン朝の人々がみずからをなんと呼んでいたかという点、いろいろな呼び方があるが、非常によく見られるのは Devlet-i Âl-i Osman (オスマン (家) の国家)、Devlet-i Aliye-i Osmaniye (オスマン家の崇高な国家) ないしは Devlet-i Aliye (崇高な国家) という呼称だった。そこには「トルコ」というエスニックな民族的トルコの属性はどこにも加わっておらず、ただ、オスマン家の君主をいただく王朝ないし国家 (devlet デヴレット) であるという意識のみがあらわれていた。

しかも、その王朝の位置づけとしては、前近代のオスマン朝の人々によって書かれた世界史、人類史、ないしはイスラーム世界成立以後の歴史について見ると、あくまで Devlet-i Aliye-i Osmaniye, Devlet-i Âl-i Osman というものは、常に預言者ムハンマドの時代以来、ウマイヤ朝から、アッバース朝を経て歴代続くイスラーム諸王朝の一環として位置づけられていた。その点で、オスマン朝は、オスマン家の君主をいただく一つの王朝であると同時に、イスラーム世界のムスリム諸王朝の一つとして位置づけられていたと言える。

さらに、16世紀初頭以降になると、セリム一世の征服によって、オスマン朝は、イスラーム世界の、社会経済的にも、文化的にも、最も輝かしい中心をなしていたエジプトとシリア、およびイスラームの二大聖都メッカとメディナと、そして第三の聖都というべきエルサレムを包摂することになり、単にイスラーム世界の数ある諸王朝の一つであることを超えた広がりを持つ国家として、自らも意識するようになった。同時に少なくともスンナ派のイスラームに属する他者によってもそのように意識されるようになった。ちょうどイランにおいて、新興のシーア派のサファヴィー朝が成立し、イランが次第にシーア派社会となりつつある時期において、スンナ派イスラーム的な世界帝國的な色彩を帯びるに至ったと言ってよいと思われる。

オスマン朝においても、原初においては「トルコ人」意識がある程度見られた。確かに、自らの国家をトルコやトルコ国家等と言うことはなかった。しかし、テュルク・ラシュケルとかテュルク・アスケリ等というように、みずからの集団をトルコ人の兵とかトルコ人の軍勢と呼んでいるケースは15世紀末の年代記にときどき見られる

ように、トルコ人意識をある程度持っていたのも確かである。しかしながら、次第にそのような用例も、16世紀に入ると見られなくなってくる。トゥルキスタンという言葉も用いられてはいるが、17世紀初頭の政治論の中に出てきている用例では、今我々の思っているトゥルキスタンではなく、トルコ人の農民が多く住んでいるアナトリアを指して用いている。そういう中で、次第にイスラーム国家としての色彩が強くなっていく。そしてエリートたちの意識の中でも王朝の所属意識、そしてムスリムという意識が強くなっていった。

その意味では、オスマン帝国は、「トルコ民族国家」よりも「イスラーム帝国」であった。ただ、実体において、やはりトルコ的古層とでも言うべきものと、その上に浸透してきているイスラーム的な部分、二つの部分がムスリムの支配層の中にもあった。ここに、既に文化の重層的構造が見られる。このような重層性はアラブ以外のムスリムのいずれの社会についても強弱の差はあれ見られる。またアラブ化した地域でもそのような重層性は、例えばマグリブでは、ベルベル的なものとアラブ的なものとイスラーム的なものが重なって現れてくる。このような点では、東南アジアのジャワ等もまた似るところがある。

イスラーム世界ではないが、例えば日本の場合、儒教、仏教、そしてもともと日本にあった意識とが重なり、オスマン朝のトルコ系ムスリムの場合と宗教は違うが、日本にも似たような重層的な構造が既に存在していたと言えるかと思う。しかしオスマン朝の場合、イスラーム的な部分がより浸透し、より融合化していた。既に、ここにおいて、一つの担い手である民族の持ってきた何かと、そしてイスラーム的なものの重層性が見られる。ただ、その相対的比重の評価については、かつてはイスラーム的なものが圧倒的な形で意識されていた。近代に入って、民族国家としてのネーション・ステイト形成が始まったとき、トルコ的古層が、俄然、非常に拡大して、意識の前面にあらわれてくるという現象が生じた。

支配領域について見ても、この国家は、イスラーム世界の西北の辺境に成立した国家で、かつてのビザンツ世界をむしろ中核としている。文字という指標を用いると文化圏というものは最も見えやすくなるが、可視的に言えば、ビザンツ世界というのは、ギリシア・キリル文字圏であるが、オスマン国家は、これを征服することによって成立した国家であった。同時にイスラーム世界、すなわちアラビア文字圏の歴史的な中核部分を占めてきた部分をも包摂するという構造を持っていた。

その住民についても、国家の初期の中核的な担い手としてはムスリム・トルコ系ないしは、少なくともムスリム・トルコ的になった人々を中核としながら、ムスリムの

諸民族と非ムスリムの諸民族をも包括していた。その意味では、その中に住んでいる人間集団の分布について見ても、宗教的にも言語的にも民族的にも非常に重層的な構造を持っていた。しかもその重層性はそれぞれが自己完結しているというわけではなく、それぞれある程度の凝集力を持ちながら、しかし同時にかなりの程度にお互いの間で人が動くという流動性と固定性のちょうど両方を保つような形で各層が存在して、それが重層的に重なりあっている世界であった。

その上にイスラーム的な被膜が、非常に穏かにかかっている。その被膜が少しずつ、内容は受け取り手によって変わっていきながら、浸透していくという構造を持っていた。そして、そのもとに言語と宗教と民族を異にするさまざまなムスリムと非ムスリムの人々の世界、生活形態を異にする人たちの世界が覆い込まれているという構造を持っていた。その背景に、さらにそれ以前の諸文化世界の遺産とそして諸地域の環境があって、これらが一つの全体を織りなす形を持っていた。その意味で、オスマン帝国をとらえる場合に、特にトルコ語から入ってオスマン帝国史をやる人間は、どうしても、ムスリム・トルコ系の世界のみを押さえて、これでオスマン帝国だというつもりになりがちである。しかし、オスマン帝国を真に総体として理解するためには、やはりこのような重層的構造を念頭に置き、その中で個々の部分を位置づけながら全体を見るという視点が欠かせないであろう。さまざまな異質なものが互いにある程度凝集性を保ちながら、ある程度お互いの間で融通性があるという形で重なり合っているような世界を切ってみるという意味で、重層性という概念を使う際に、オスマン帝国は重要な検討の対象であるといえよう。

3. 「文化世界」と人間集団の重層性

文化を、人間が集団の成員として後天的に習得し共有する行動の癖、思考や感性のパターンも含めた行動の癖と定義すると、文化を共有する人々の分布に基づき、さまざまな広がり文化圏を定立しうる。そのなかで、互いにかなり違うところもある人々が、基本的なところで何かを共有することで成立するものとして、「大文化圏」というものを想定しうる。例えば、アゼルバイジャンで生まれて近代イスラーム運動に参加し、オスマン朝にやって来て、後に、トルコ革命にも加わって「トルコ人」となったアフメット・アーオウル、あるいはアガエフという人物がいる。この人は、文明 *medeniyet* というものを定義して「そこにいて、自分がまったくのよそ者でないと感ずることのできる世界の広がり、それが文明というものだ」と言っているが、それは実

感であると思われる。そういうものがどこかにあると措定してもよろしかろう。

ここで、アーオウルという「文明」というのは、私の「大文化圏」にほぼあたるものといえる。「大文化圏」というものを一応想定し、それを「文化世界」と名づけるとすると、オスマン帝国は、文化世界としてはイスラーム世界とかつてのビザンツ世界、ないしは正教世界の南半分の上に立って成立していたと言っていい。その背後の文化的な遺産としてはオリエント世界、ヘレニズム世界、そして内陸アジアの遊牧民の世界の伝統を踏まえていた。そのことは、オスマン朝の君主の称号の中にもあらわれている。スルタンという世俗的なものではあるがイスラーム世界で成立した称号、古代オリエントまでつながる伝統を持つシャーというイランに由来する王号、そして中央アジアの遊牧の世界につながるハンという称号、このいずれも用いている。王の花押であるトゥグラの中にも、これらの称号が現れる。王の称号の中にも、オスマン帝国が背後に有していたさまざまな文化圏の広がり、文化圏から見た重層性があらわれているのである。しかも、オスマン帝国の民、特にその中核地域であるアナトリアとバルカンの民は他のムスリムたちからはルームと呼ばれているが、ルームというのは言うまでもなくローマということであり、その重層性は周囲の人間によってもある程度認識されていたと言ってもいい。このように、文化世界の系譜上、既に甚だ重層的な構造を持った世界の上に、オスマン帝国は成立していたといえることができる。

もう少し文学的な例としては政治論 *siyasetname* 類や倫理学 *ahlāk* の書の中で理想化された支配者についていえば、一方で純イスラーム的なものとして預言者ムハンマドがあらわれる。今度は宗教としてのイスラームから離れてササーン朝をへて古代オリエント世界につながるオリエントの文化の伝統の現われとして、正義者としてのホスロー2世があらわれる。またヘレニズム世界に由来する知恵者としてアレキサンドロス（イスケンデル）があらわれる。さらに中央アジア遊牧民の世界の英雄としてのチングスハンの場合、ときにオスマン帝国のよって立つ文化世界の性格からアンビヴァレントで愛憎半ばしており、時に破壊者として、時に世界征服者としてあらわれるというところにも象徴されている。

「文化世界」の観点から見たこの重層性は、通時的変動の痕跡として存在するのみでなく、多文化に属するさまざまな人間集団が複雑にオスマン帝国の中に分布してそれらの人々が担うさまざまな諸制度が存在するという形で共時的な構造としても現われていた。その好適例は、裁判制度に求められよう。裁判制度では、オスマン朝の秩序は、理念の上では、シャリーアに基づいている。しかし、それを補足する施行細則のようなものとしてカヌーン（世俗法令）がある。カヌーンの中には、単にオスマン

朝のスルタンの勅令によって成立したもののみではなく、それ以前の諸王朝、場合によると非ムスリムの諸王朝の時代のそれぞれの地域の慣習法といったものも取り込まれている。

そして、さらに、正教徒の場合で言えば、正教会によって自治的な裁判制度が成立し、そこではビザンツ法が行なわれる。さらにその下にはさまざまな民族、あるいは共同体の慣習法が行なわれていたのであって、「文化世界」から見た重層性が法の構造にもあらわれるという世界であった。例えばアルバニアの場合、公式にはシャリーアに基づいたカーディのイスラーム法廷が最も権威のある法廷だが、ギリシア正教徒の場合にはさらにギリシア正教会が主催するビザンツ法に基づく法廷がある。そのもとで非常に多くのアルバニアの人々が実際に服していたのは、アルバニア山岳民のそれぞれ固有の習慣法であるというような世界が成立していた。ここにも重層性があらわれていた。

このような重層的な構造をトータルに把握することなくして、オスマン帝国の全貌は明らかにされ得ないと思われる。しかしながら、私ども、どちらかというトルコ語から接近して、ムスリム・トルコ系の人間たちの世界を主な研究対象としている研究者の反省もこめていえば、研究の現状においては、実質上は、個々の集団について個別的に検討されているにすぎないという面がある。分析の対象について、もう一度、非常に重層的な構造を持ったものを、個別に分析しながら、それぞれを全体の中で位置づけ直し、オスマン帝国の全体像を描き出すという作業が今日では必須であろうと思われる。そういう意味では、まだなすべき課題は非常に多々あり、分析の対象としてのオスマン帝国は、文化的重層性について考えていく上での材料の宝庫であると言えよう。

4. 「文化世界」と地域

オスマン帝国は、文化世界としてのイスラーム世界とビザンツ世界、ないしは正教世界、言いかえればアラビア文字圏とギリシア・キリル文字圏に立脚していた。その際、文化世界というものは、確かにある程度空間的に広がりがある。しかしながら、文化世界のより本質的な基礎は、むしろ文化の担い手としての「人」に依っていると置いていいであろう。それ故、文化世界というのは、別の言い方で言えば、ある文化の担い手とそのネットワークの分布の密度から見て、濃密な密度で分布している空間的な広がりとしても捉えられる。

少し脇道に入るが、より限られた文化的観点からの人の分布に基づくカテゴリーとしては、例えば民族圏というようなものも考えられよう。現代中東におけるアラブ圏、イラン圏、トルコ圏といったものである。ただし、言語ないしアイデンティティに基づく民族圏というものは、時に文化世界の境界を越えて広がっているケースもあり、それをどう扱うかという問題も出てくる。例えば、トルコ圏の場合、同じトルコ系言語を用いているとはいえ、トゥバ人の場合にはラマ教とモンゴル系の文化の影響を受けて、語彙的にも非常に違った言語になってしまっているが、民族圏としてはトルコ民族圏に属するというようなケースが出てくる。ここでは、この問題はとりあえずおくことにしよう。

他方で、主として空間に立脚した概念として、地域という概念がある。地域研究とは何かということは非常に問題になるわけであるが、地域概念それ自体が、もう既に本シンポジウムの諸報告の中で報告されているように、観点により非常に多様で、多義的な概念である。しかしながら、特定の空間に立脚する概念も成立するということには、疑いはないだろう。文化世界のほうは、ネットワークの広がりとして捉えられるものであり、地域というのはむしろ物理的空間として捉えられるという面があると思われる。その点は原報告の中で、片倉氏と高谷氏の概念の対比が出てきた。片倉氏の場合は、やはりイスラーム圏から出発して研究しておられるので、ネットワークとしての文化世界というものがイメージの中心になっている。高谷氏の場合は生態学的なものから出発しておられるので、物理的空間の広がりとしての地域という面から、最初の出発点を築こうとする傾向があると言っているかと思われる。

空間としての地域の場合には、少なくとも幾ばくかは、地理的環境と生態系に立脚する部分を持たざるを得ないであろう。そのような地域概念のなかで広大な空間を含むものの好適例として挙げ得るのは、このオスマン帝国と最も関係の深いところでは、ブローデルが構築した地中海世界といったものであると思われる。まさにオスマン帝国はこのブローデルの規定した地中海世界の4分の3を2世紀以上にわたって支配した政治体であった。その意味では、オスマン帝国を地中海世界の4分の3として捉えるということも可能である。ここでは、今度は捉えるほうの視点、概念のほうから見て、重層的に違った概念で捉えていくことが可能な対象でもあると言えるだろう。

少しまた横道であるが、より小さめの地域の概念についてもふれたい。オスマン朝に関係する地域の概念としては、中東とバルカンという概念がある。オスマン帝国はまさにこの二つの地域にまたがる、バルカンの全域と中東のほぼ3分の2を支配下に置いていた、その中に組み込んでいた政治体であったわけである。

ここで、しかし、中東、バルカンという概念について見ると、二つともごく新しい概念である。バルカンについてみても19世紀後半によく地域概念としてのバルカンが成立した。中東について言えば、さらに新しく、1900年代のはじめに、米国の海軍軍人で、戦略家、歴史家でもあったマハンが言葉をつくり出し、現在の外縁と内包を持つに至ったのは20世紀中葉、特に第2次大戦後の英国においてであったという、非常に新しい概念である。この中東、バルカンの概念について見ると、地中海世界というような、非常に広大ではあるが、かなりまとまったさまざまなサブ地域を合わせた一つの地理的環境、一つの生態系をなしているものに比べて、かなり違った性格がある。バルカンといえば、実体として、実際はビザンツ世界の西半分、そしてイスラーム化とトルコ化がかなり限定されていた地域ということができし、別の言い方では正教世界の南半分であるということが出来る。その意味では、バルカン概念というのは、地域概念で空間の広がり、そしてその土台になっている地理的環境と生態圏に依っているように見えながら、実は文化に帰着するにすぎないと言うことができると思われる。翻って、中東について見ても、実体としては、イスラーム世界において最も長期的持続的に中核地域—ここで中核地域というとき、さまざまな人間活動の分野においてイスラーム世界の広汎な部分において共有されるような多くのパターンの持続的な供給源、創出源であった地域という意味を与えたい—であったということが出来ると思われる。その意味で、中東というのも、空間的な広がりに基づく地理的環境と生態圏に立脚するかに見えるが、概念が現在の内包と外縁をもって安定的に定着した経過を見ると、上で触れたイスラーム世界の「中核地域」を一語で示す便利な概念が、現地においてもなく、そして外側においてもなかったことから、現在の内包と外縁を持つ中東概念ができ上がったとみてよろしいかと思われる。

そう見ると、中東という概念も、再び「人」によって担われた文化に帰属すると言えてよいと思われるわけである。

5. 概念と対象の重層性

オスマン帝国というのは、さきに述べたように、分析の対象として、対象自体の構造において、さまざまな観点から重層性を持つ。従来のオスマン帝国史は、その一つか、せいぜいで若干の層についてのみ検討していたにすぎない。今後は対象の重層性を踏まえて、個別の部分を検討する際にも、常に全体の中でのその位置づけを踏まえながら再検討していくことが必要であろう。

そして、その際、オスマン帝国に内在的にのみではなく、もう少し周りの世界との関係で捉えていこうとすると、またはもう少し広い場を設定して、その場の中にオスマン帝国を位置づけながら、そのオスマン帝国の重層的構造を明らかにしていこうとすると、一方で地域研究の一環として、一方では文化世界の研究の一環として捉えるということが必要になってくるだろうと思われる。

しかし、そのような試みを行うときに、一方において、対象をとらえるための枠組の基礎として、例えば、地域概念そのもののいわば多義性、重層性が表面化してくることになるであろう。その意味では、オスマン帝国というものは、分析することによって、例えば中東という概念、バルカンという概念の便利さと限界が見えてくるような試金石でもあろう。

さらに、とりあえず「空間」を出発点として成立する「地域」概念というものと、そして「人」を出発点とする「文化圏」、「文化世界」といった概念の二重性も問題となり得る。その意味で、オスマン帝国というものは、対象そのものが非常に重層的な構造を持っており、そういうものをとらえる際の一つの試金石となると同時に、非常な重層性を持っているために、これを分析するための「概念」の重層性そのものを表面化させ、そしてこれを検討していくための試金石としての意味も持ち得るであろう。このような対象の重層性と概念の重層性を常に自覚して、それぞれを位置づけながら研究を進める際、オスマン帝国は、このような検討の素材として極めて有効な試金石たり得るように思われる。

【付録 質疑応答のまとめ】

○ 政治的な秩序としての重層性という点からはいかがか。

鈴木 どちらかというと、今回の話は様々な多文化的要素の重層性のほうに中心をおいた。そして、そのような文化的重層性が乗っている枠のようなものとして政治的な重層性があると思うが、この政治的重層性においても、ひとつは領土そのものが重層的で、南半分、つまりアラブ圏では従来のシステムをほぼ、かなりの程度保ちながら、その上に一応のオスマン帝国の地方支配の構造を乗せていく。ある範囲を超えて勝手に動き出すときにはつぶせるけれども、それ以上、内部にまで自分の支配を浸透させているわけではないというシステムをとっていた。アラブ圏の中でももう少し中に浸透させようとした地域がイラクと大シリアであっただろう。マグリブとエジプトの場合には非常に緩やかに上に乗っているというシステムであったといえる。したがってオスマン朝の割合に緩やかな枠と、それからその下のそれぞれの地域の、少し改変してあるけれども、従来のシステムとが共存している、このような意味で重層的な構造を持っているといえる。しかもその地域のシステムのほうは、さらにそれ以前のイスラーム時代の、それ自体が重層的なシステムの上に乗っているという形であったと思われる。

本土に近いアナトリアとバルカンの地域については、オスマン帝国の支配はかなり地域地域に内部浸透的になっていく。しかし、それも征服した時期によって違って、征服して少し時の

たった土地ではカヌーンを通じて、できるだけある方向で齊一化していく。中央集権的な方向で齊一化していきながら、一方で新征服地については従来のシステムがかなりの程度に残されている。ある期間、ある程度少なくとも許容されるという形をとっていて、そこでも重層性がある。

それに加えて、さらに生業形態の違う人々を扱う場合、とりわけ移動性のある生業形態に属している人々、辺境の人々、例えば辺境に近い地域にいる遊牧民たちのように、帝国の本土の中でペリフェリーに属する人々に対する支配は、同じムスリムの臣民の支配においても姿を異にしており、とりわけ遊牧民や辺境の幾つかの地域における支配のあり方は、いわば本領安堵的な支配の形をとっている。その意味で非常に緩やかな現地の事情に即したシステムと、オスマン朝の中央集権化していくシステムとの間で重層性が見られる。しかも、オスマン朝の支配がかなり貫徹している地域においても、ムスリムに対する支配と非ムスリムに対する支配では違っていた。非ムスリムに対する支配はミレット制というよりはむしろズィンミー制度に基づき、それぞれの宗教、固有の信仰と法と生活慣習を持って、ある範囲での自治的な暮らしが認められ、裁判権においても重層性が見られる。つまり、さきほど触れたような形をとっていたものと思われる。

その意味では、近代国家から見ればまことに緩やかな重層的な構造を持っている。西欧の「中世」国家に比べれば、スルタンの一円課税制がある。また巨大な常備軍と官僚制があるという点において、そしてスルタンによる全域的な交通と通信の手段の確保が見られるという点で、著しく集権的である。しかしながら、近代国家に比べれば著しく緩やかな重層的構造を持ったシステムであったといえるだろう。近代国家の場合は、あらゆる重層性をあくまで打ち砕いていこうとする志向が非常に強い。

その志向の影響として、西欧の「近代政治」の影響がオスマン帝国に及んだときパンドラの箱を開いたという面が大いにあるだろう。その中で生活形態も違い、慣習も違い、言語も違う人々の中で緊張感が生じてくる。そこに西欧のナショナリズムの影響が入り込んでくると、新たな紛争の種が生じてくるということになったのではないか。

○ その地域に緩やかな形であるにせよ、地方長官としてある意味では違った民族集団に入っていた人間がやってくるというようなケースというのがおそらくあっただろう。少なくとも交通や通信手段を整備すること自体は、ある意味では今までの形とは違う社会システムをとらざるを得なくなることにつながる。その際の抵抗感というものはそれほど強くなかったのか。

鈴木 その場合、やはり二つに分ける必要があるだろう。以前からイスラーム世界に属していた地域にオスマン支配が成立する場合と、それから元々はイスラーム世界でなかった地域がイスラーム世界に編入されたケースとあって、後者の場合にはやはり違和感は当初はかなり存在していた。ただ、重層的な支配の構造を持って包摂していくために、相対的に違和感は和らげられていただろう。そしてその支配が定着していく中で、非常に合理的で自由で寛容な支配だと言ってしまふと問題があると思うが、少なくとも緊張感はあっても、ある範囲で均衡を見出しうるような、ある範囲で安全を提供しうるようなシステムであったと言っているかと思う。

ただ、同時に、交通手段の問題については、オスマン帝国が成立していた世界というのは、一方では、かつてからイスラーム世界だった地域、もう一方はビザンツ世界に属していた地域で、このいずれも「旧世界」の3大陸を結ぶ東西交渉及び南北交通のちょうど要路に当たるところで、そもそもイスラーム世界、ビザンツ世界が始まる前から人々が流れ、モノが流れ、情報が流れることが前提になって繁栄していた世界、生産主義の世界ではなくて、商業を中心にしたむしろ流通の世界であったと言っているであろう。その意味では、その連続線上で整備が行われるということになるから、より辺境的でより固定され、より閉鎖的だった地域での抵抗感は大きかったと思うが、人口稠密なメイン・ロードの部分においては違和感は少なかったのではないか。確かにイスラーム世界の中でも異民族の支配者、特に北からあまり見慣れないトルコ系の支配者が現れたということには、かなり違和感があつたであろうとは思ふ。しかし、イスラーム世界が成立して以来、同民族が同民族を支配するというのがむしろ異例の事態で、例えばイランの場合にはプワイフ朝を除けば近代に至るまで殆ど全部異民族支配である。イスラーム世界ができて以来、当初はアラブが支配している。プワイフ朝だけがかりうじて、ダイラム人というと、田舎のイラン

人という感じだが、これが支配していて、その後はセルジューク朝が来てトルコ系が支配する。イル汗国ができてモンゴルが来る。モンゴルがつぶれた後、また限りなくトルコ化したモンゴルとそれからトルコ系の王朝が連続する。サファヴィー朝ですら、おそらくはクルド系の君主を頭にいただいたトルコ系の軍事集団が国家の中核を成すような国家であった。エジプトの場合にも、そもそもファティマ朝の場合はアラブはアラブだが、マグリブからやってきてかなり違った要素、おそらくベルベル的要素も入っているであろう勢力で、アイユーブ朝の祖はクルド系で、そしてマムルーク朝は前半がトルコ系で後半がチェルクス系である。そしてオスマン朝がやってくるという具合で、異民族支配がむしろ恒常的である世界であった。

それがなぜ可能だったかという点、やはり一つには、その当時の少なくとも支配する側のアイデンティティと、他者を自己と識別する基準と、そのものとなる自己のアイデンティティのあり方と、そして人々を統合し共存の枠をつくっていく軸がむしろ宗教にあったということが大きいであろう。その意味では、パレスチナの地に十字軍が入って来て異教徒の支配が成立したときには同地のムスリムにとって非常に違和感が大きかっただろうし、イベリアで長年ムスリムの支配に慣れてきたムスリムの人たちにとって、レコンキスタによって異教徒が侵入してきたときにも違和感が非常に大きかったであろう。それに比すれば、異民族のムスリムの支配者が入ってくる場合には、違和感はないと決して言えないが、より軽微であったであろう。現代の人間が考えるような異民族支配とは違った形で意識されたと思われる。

○オスマン帝国というのはいわば鈴木先生の用語でもあるし我々の用語でもある。当時の前近代のオスマン朝のいわば中核を担ってきた人々は違う呼称で自分たちを呼んでいた。それをなるべく尊重したいという鈴木先生のご意見だが、同じようなことと言えば、ビザンツというのは19世紀のドイツ人が編み出した名称で、そんなものは歴史的に存在しなかった。どうしてビザンツはビザンツなのか。

鈴木 ビザンツ人というよりむしろ、渡辺金一先生がおっしゃったように、中世ローマ帝国と言ってもよいだろうし、中世と言っても語弊があるとすれば、東ローマ帝国と言えば一番よろしいのかと思う。しかし、確かにローマではあるのだが、もはや、ラテン語的ローマと、いわゆる「ビザンツ」の場合は、文化的にも非常に異なったものとなってしまっていたようにも思われる。こここのところは原史料にあたって本人たちの中に入っていくことを今のところしていないので、とりあえず便宜上ビザンツという用語を使っている。

○ルーミーという呼び方もある？

鈴木 オスマン朝の人間たちがルーミーと呼ばれるのは、ルームつまり「ローマ人」の土地を支配するようになったからである。オスマン朝ルームの中でもギリシア語を母語にするギリシア正教徒はルームと呼ばれるが、それは元来はローマを意味している。

○文化世界という言い方をしておられるが、説明を。

鈴木 文化圏のうち、基本的な枠組みを共有しており、非常に大きな広がりを持っているような大文化圏、これを文化世界と名づけてはと、一応定義した。

○『文化類型学』という本を昔読んだことがあって、そこでラーメン、スパゲティ等々の文化圏という言い方がされていたのを思い出したが、考えてみると、そのような場合、ラーメン文化世界という言い方は絶対しない。そうすると「世界」という言葉を使い 위해서는 幾つかの文化の主たるメルクマールというものがあり、そこを共有したところで成立するようなものと考えてよいのか。

鈴木 私の場合には主としてワールド・オーダー、世界秩序の観念があって、その観念がある程

度共有されていて、同時にそのもとでの秩序維持のための法というか、行動のルール、法に近いものがかなりの点で共有されており、そしてその多くの場合、文明語・文化語というか日常語を超えた言語の共有が見られ、そして少なくともその文明語・文化語の綴られる文字が共通の文字として綴られるというくらいのメルクマールはあって、しかもそれに所属している人間集団として、言語も民族も異にするかなりの広がりを持った集団がそこに存在する。世界秩序のもとに、実際に規模などは違うが、かなり共通の政治単位についての意識も存在している。その政治体内での支配者の正統性の意識についても、どこか基本的なところで共通の正統性の理念が存在しているというくらいの形を持ったものを大文化圏ないしは文化世界と呼びたいと思う。この点シャリーアの存在というのはイスラーム世界にとって非常に大きいと思う。